十五、宝塔寺と元三大師の画像

宝塔寺（東五反田一丁目二番二十九号）は、五反田駅前から桜田通りを白金方面へ進んだ右側にある雉子神社（東五反田一丁目二番三十三号）の、すぐ裏手にあります。石段を登り山門をくぐると、境内の左手に元三大師を祀る元三大師堂の古いお堂があります。

　昔、この宝塔寺は、「法東寺」といい、南品川にありました。その後、江戸時代の万治年間（一六五八～六〇）に大崎に移りましたが、目黒川の洪水で、寛文年間に（一六六一～七二）に現在の場所に移り、その名も「宝塔寺」と改めたのだそうです。

　この宝塔寺が、まだ南品川にあった頃、寺には修行をしているお坊さんが一人で住んでいました。ある日、お坊さんが、いつものようにお経をあげていると、歳をとった僧が訪れ、一本の掛け軸を置くと、黙って立ち去りました。やがて、お勤めを終えたお坊さんが、その掛け軸を開いてみると、それはそれは見事に描かれた元三大師の画像でした。

　元三大師とは、天台宗で最高の位である座主の職の第十八代を勤めた良源のことです。人びとから尊敬を受けた立派な僧で、亡くなってから「慈恵大師」の名を贈られましたが、一月三日になくなったことから元三大師とも呼ばれています。

　お坊さんは、たいそう喜んで、早速画像を掛け、日夜修行に励んだそうです。このことがあった後、この寺には、信者が大勢集まるようになり、寺の近くに住む漁師たちは、豊漁の時には魚を下げて。お礼参りに訪れたということです。やがて、宝塔寺は、大崎、そして現在地へと移転しましたが、寺の名声は、ますます広がっていきました。

　さて、やがてこの話が上野の寛永寺にも伝わり、「珍しい画像のようなので、是非持ってきて見せて頂きたい。」という申し入れがありました。お坊さんは、他の掛け軸にまぎれてしまうのを心配して、軸の裏側に小さな目印をつけて持っていきました。

　何日か経って、寛永寺から「画像を返す。」という知らせが届き、早速、小坊主を使いに出しました。小坊主が、寛永寺に着き、案内されて部屋に入ると、何と、そこには同じような掛け軸が何本も並んで掛けられているではありませんか。

「さて、どれがうちの寺の掛け軸だろう？」

と、小坊主は、迷っていましたが、何を思ったのか、

「茶碗を貸してください。」

と、たのみました。

　それは、小坊主が、朝晩画像の前に水をささげると、大師の顔がかすかに微笑むことを思い出したからです。小坊主が、茶碗に水を入れ、うやうやしく画像に供えながらめぐると、果して、ある画像の前に水をささげたところ、大師が、にっこりと微笑んだように感じました。小坊主は、この掛け軸を受け取り、喜んで寺に戻りました。お坊さんが、そっと裏を返して見ると、目印のついたまぎれもない宝塔寺の掛け軸だったのです。このできごとがあった後は、願い事の叶う寺としてますます栄えたということです。